

丹下 健 (たんげ たけし)

1958年、千葉県生まれ。1985年、東京大学大学院博士課程1年時に中退し、東京大学農学部付属演習林助手。2000年に同演習林教授、2015年に東京大学大学院農学生命科学研究科長・農学部長、2021年に東京大学副学長。研究テーマは「樹木の成長に関する生態生理学的研究」。森林立地学会会長や日本森林学会会長などを歴任し、東京大学野球部部長をはじめ、東京六大学野球連盟理事長も務めた。著書(共著)に『造林学』(第4版)。



今春、国立研究開発法人森林研究・整備機構(森林機構)の理事長と森林総合研究所所長に丹下健が就任しました。研究者への歩みや今後の抱負、研究でのエピソードや趣味などについて、古澤仁美広報普及科長がインタビューしました。

古澤 研究者になったきっかけは何ですか？

丹下 私が生まれた時、父が東京大学農学部付属演習林(千葉県鴨川市)で助手をしてました。小学生の頃に、父の実験を見に行ったり、手伝ったりもしました。父は何だか楽しそうにやってました。それが多分、きっかけかもしれないですね。

古澤 どうして林学の道に進んだのですか？

丹下 理系志望で、生物が好きでした。目に見えない遺伝子よりはやっぱり、もっと大きなものをやりたいと。それで樹木、木ですかね。東京大学に入学した時から林学志望でした。

学生4年間は野球部第一でほとんど部活でした。大学院には進みたいと思っていたので、部活を終えた4年生の冬学期から本格的に勉強し始めました。それから留年1年、修士2年、博士課程1年の4年間、勉強に集中しました。その後、付属演習林の助手(現在の助教に採用されました)。

3年の時、健全な森林を育成する技術などを担う「造林学」の研究室に入り、スギの成長はどうして斜面の上部で悪くて下部がいいのかを卒論のテーマに決めました。土壌の水分状態が季節でどう違うか、毎月土を採って分析しました。この時から今に至ってずっとスギの成長と土壌特性をテーマにしています。

1989年に演習林から造林学研究室に戻り、

インドネシアの熱帯林など海外の研究プロジェクトにも関わりました。

古澤 理事長就任前は森林総合研究所にどのようなイメージを持っていましたか？

丹下 国立の研究所として国の政策実現にどう貢献していくかが一番目のミッションに置かれていて、それが大学との大きな違いだという印象を強く持っていました。ただ、基礎研究がしっかり行われて広い分野の蓄積がないと、さまざまな行政課題や、最近の林野火災をはじめ、クマやシカの被害にもしっかり対応できない。やはり基礎研究が大事ですね。一人では追えない木の一生を対象にしていますので、組織的な研究体制は強みだと思います。研究者は、研究資料やデータを一人で抱え込まないで、しっかり次の世代につないでいくことも大切ですね。

古澤 就任してまだ間もないのですが、イメージは変わりましたか？

丹下 やはり大きな組織なので、研究所全体を俯瞰し、さまざまな研究をつなげたり、新たな企画を立てたりする人が必要と感じます。

古澤 今春、森林総合研究所は第6期中長期計画(令和8・14年度)を策定しました。どういった点に留意しながら進めていきたいと考えていますか？

丹下 木材価格が低迷する中、カーボンクレジット

でしたね。(笑)

古澤 趣味は何ですか？

丹下 趣味らしい趣味はないのですが、家族から「献血が趣味」と言われてしまうほど献血しています。

古澤 座右の銘はありますか？

丹下 誰の言葉なのか思い出せないのですが「過去の失敗も今が良ければ笑い話になる」という言葉はすごく思っています。野球選手を辞めたときはショックで人に話せなかったのですが、逃げずに続けたことで、今となってはいい思い出です。失敗したり、挫折したりしても笑い話になります。今が大事ということですね。

トであるとか、ネイチャークレジットであるとか、より良い森林、生物多様性の高い森林に整備することで、森林所有者の収入が増える仕組みが必要だと思います。中長期計画には「森林の生物多様性の評価と保全に向けた研究開発」という戦略課題が盛り込まれています。生物多様性の評価手法の開発では、衛星画像などで容易に森林の保全状況を確認できる指標が作られれば、森林整備を支援したいという企業が増えるのではないかと思います。

もう1つは、林野庁が先日公表した森林・林業基本計画で、林業に適さない人工林を天然林に戻すなどにより、現在の1020万haの人工林を将来的に630万haまで縮小していくための今後5年間の数値目標が示されました。そのための林業適地をゾーニング(区画分け)する仕組みづくりを支援したいと考えています。

このほか異常気象や林野火災、シカの食害、クマ被害など取り組むべき課題は多岐にわたります。

古澤 森林機構の理事長としての抱負を聞かせてください。

丹下 職員がやりがいを持って仕事に取り組める環境づくりが大事と思っています。理事長に就任して気づいたのですが、研究所にはトイレが性別によらず同じ数だけ整備されていますよね。

古澤 ここ筑波研究学園都市に移転(1978年)する際、女性研究者たちが常勤だけでなく非常勤を含めた女性職員の人数を根拠として示し、トイレ増設を訴えました。先見の明ですね。

丹下 森林機構にはダイバーシティ推進室があり

ます。性別だけじゃなく、価値観や社会的属性、宗教が違っていても尊重し合える、働きやすい職場づくりに私も取り組んでいきたいと思っています。

古澤 ところで、研究者になるにあたって影響を受けた人はいますか？

丹下 昨年12月に亡くなられた東京大学名誉教授の佐々木恵彦先生の影響が大きいかもしれないですね。夢を語り、大きな話をされる先生でした。私に意識改革をもたらしてくれました。

古澤 研究で印象に残るエピソードを聞かせてください。

丹下 仮説は外れるっていうことですね。卒論で立てた仮説が正しいと信じ込んで研究を続け、仮説通りにならないデータが出て、試行錯誤しました。仮説が外れ続けた中でいろいろ考えた経験が今となっては良かったと思っています。

古澤 これからの研究者に向けてメッセージをお願いします。

丹下 私はスギを軸に研究を続けてきました。そういう軸をつくった上で自分の視点でいろんなことに取り組むことが大事だと思います。フィールド調査を通して、そうした軸をつくってほしいですね。

古澤 野球好きと聞きましたが…。

丹下 中学までもう野球ばかりやっていました。東京大学で野球をやりたいと高校時代は勉強に集中しました。大学で再び野球をやり始めましたが、新人戦で2打席三振したところまでで選手人生は終わりました。その後はマネージャーになり、3年生からは東京六大学野球連盟の事務所にも毎日のように通い、講義にはほとんど出ません



森林総合研究所広報普及科の古澤仁美科長(右)のインタビューに答える丹下健理事長(所長)=森林機構理事長室(茨城県つくば市)